イギリスにおけるツーリズムの発展と海浜リゾートの盛衰

松　鷹　彰　弘

1　はじめに
2　イギリスにおけるツーリズムの成立
　2－1　貴族・ジェントリによる楽しみのための「ツアー」
　2－1－1　巡礼の旅
　2－1－2　グランド・ツアー
　2－1－3　温泉から海浜リゾートへ
　2－1－3－1　温泉リゾート・バース
　2－1－3－2　海浜リゾート・ブライトン
　2－2　中流階級による「ツーリズム」の成立
　2－2－1　貴族のツアーから中流階級のツーリズムへ
　2－2－2　中流階級の価値観と生活
　2－3　労働者階級を含む「マス・ツーリズム」の成立
　2－3－1　国民所得の増大とレジャー産業の成立
　2－3－2　正しいレクリエーション運動とトーマス・クック
　2－3－3　海浜リゾートでの休暇
3　ツーリズムの発展と海浜リゾートの衰退
　3－1　海浜リゾートの必然性
　3－2　海浜リゾートのさまざまな展開
　3－3　海外パッケージ休暇の登場
　3－4　海浜リゾートの衰退
4　まとめ

1　はじめに

本稿は、世界で最初に「集団的社会現象」として現われたイギリスの「ツーリズム（観光）」が、どのように成立しどのように変遷してきたかを、人々の価値観や生活との関連に重点を置いて概観しようとするものである。イギリス人の観光についての研究成果は多数にのぼり、その博学と見識には感服するばかりなのであるが、グランド・ツアーから現代に至るまでの観光の大きな流れを筆者なりに把握してみたいと考えて試みた。

ここ数年、アジアの観光を視察する機会に恵まれているが、そこで見るさまざまな観光に関する事象のなかに、その地を最初に訪れた外国人であるヨーロッパ人の影響が窺われることがしばしばある。アジアの観光地で、ヨーロッパ人で満席のジャンボ・ジェット機に乗り合わせ、現在でも国際観光における観光客の2/3をヨーロッパ人が占めるという事実を実感させられたこともあった。

フランスとイギリスはともに観光先進国ではあるが、フランス人のヴァカンスと比べるとイギリス人の観光には日本人との共通性が感じられる。島国であることから生じる地理的・心理的要因、基本的に労働を尊重する価値観、経済大国であることなど共通点が多いからだろうか。日本人の観光に現在起こりつつある事柄の多くの先例を、イギリス人のそれに求めることができると考えている。

2　イギリスにおけるツーリズムの成立

ここでは、イギリスにおける「楽しみを目的とした旅行[1]」が、貴族・ジェントリによる「ツアー」から、中流階級による「ツーリズム」の成立、一般大衆を含む「マス・ツーリズム」に至るまでの経緯を、それぞれの階級の人々の理念や価値観との関係に重点を置いてのべてみたい。

なお、ツアー（tour）という語は、ろくろないしは円、すなわち中央の点ないしは軸の周りを回る運動を意味するラテン語の「tornare」やギリシャ語の「tounos」という語に由来する。この意味は「ぐるっと回ること」を表す近代英語に変化した。tourism（観光）の接尾語-ism は、「ある行動ないしは過程、すなわち典型的な活動ないしは特性」として定義され、tourist の接尾語の-ist は「与えられた活動を行なう人」を意味している。

tour という語に接尾語の-ism や-ist がくっつくと、円の周りを回る行動やそれを行なう人を示唆している。円を描いてみると、出発地点があって結局その場所に戻ってくることがわかる。したがって円のように、ツアー(tour)というのは周遊する旅行、すなわち出発して元の出発地にもどってくる行動をいうのであって、それゆえにそのような旅行をする人を観光者（客）と呼ぶ（ウィリアムＦシーアボルド『観光の地球規模化[2]』)。

本稿では、塩田正志「『観光』の概念と観光の歴史[3]」における観光の発展段階に応じた英語表示（tour,tourism, mass tourism）に準じて使用している。

２－１　貴族・ジェントリによる楽しみのための「ツアー」

楽しみを目的とした旅行が集団的･一般的な形で行なわれ、“ツーリズム（観光)”として認知されるようになるのは、19世紀中ごろのことであるが、近代以前にも組織化された旅行（ツアー）がなかったわけではない。ただそれは、貴族や僧侶、武士など時々のエリートによるきわめて特権的領域であり、社会的ステータスのシンボルであった。

２－１－１　巡礼の旅

古代エジプトにも､神殿への巡礼の旅が古文書にあるといわれるが､ギリシャ時代になると「体育」「保養」「宗教」の三動機からなる旅が頻繁に行なわれる。古代ローマ時代には、エリートたちが遊びと文化のための旅を広範に行なう。それを可能にしたのは、道路網の整備と交通手段の発達である。古代ローマ市から放射線状に延びる「７つの街道」が、領土の拡大とともに、軍用道路として延長を続けるが、同時に馬車も発達する[4]。

ローマは、紀元前55、56年の２回にわたるジュリアス･シーザー（カエサル）のブリテン島侵攻後100年近くたって、ようやくこの島の征服に着手する。紀元43年、属州ブリタニア（ブリテン島のローマ名）としてローマ帝国に併合した後は、土木技術を駆使してイギリス各地の都市を結ぶ道路網を建設する。２世紀には、皇帝ハドリアヌスが北方民族の南下を阻止するため、タイン川河口からソルウェイ湾頭までの延々161kmの城壁を築かせ､ここがローマ帝国の領域の

北限となる[5]。この結果、ハドリアヌスの長壁からユーフラテス川まで敵陣を通過することなく旅行できたといわれる。

ローマ帝国の崩壊（476年）後は、道路の荒廃、治安の悪化などにより楽しみのための旅は空白時代を迎える。

中世ヨーロッパでは、熱狂的な宗教心に基づく十字軍の遠征の影響もあり、聖地への巡礼が盛んに行なわれた。この時代の巡礼を観光に含めるならば、中世は「巡礼観光の時代」だということができる。エルサレムは中世を通じて最高の目的地だった。教皇の座のあるローマや、十二使徒のひとりヤコブの遺骨が発見されたとされるスペインのサンティアーゴ・デ・コンポステーラもそれに次いだ。巡礼の繁栄はガイドブックやガイド人を生み出し、15世紀には、すでにヴェネチアから聖地パレスチナへの組織化されたツアーがあったという。

2－1－2　グランド・ツアー

16世紀になると、宗教改革により聖地への巡礼は減少し、代わってルネッサンスの影響からか知識欲による旅行が盛んになる。ドイツ、フランス、イギリスの多くの知識人がギリシャやイタリアを訪れる。イギリスでは、ルネッサンス期からオクスフォード大学やケンブリッジ大学を卒業した貴族の子弟が、卒業旅行としてヨーロッパを訪問する習慣があったが、17世紀末になるとジェントリ（後述）も加わり、その壮大さが注目され“グランド・ツアー”と命名（家庭教師として同行したリチャード・ラッセル教授が1670年に著書のなかで初めて使った）される。以下、本城靖久『グランド・ツアー[6]』から抜粋して示すように、当時としても格段の大名旅行であり、まさに「グランド」な「ツアー」であった。

・旅行目的：どこに出しても恥ずかしくない国際人の養成。イギリスは島国であるため、息子を国際的に通用するジェントルマンに仕立てあげるためには、文化的先進国であるフランスやイタリアを若い内に訪れさせことが必要不可欠だと、イギリスの指導者階級である貴族たちは考えた。エリザベス女王時代には、有望な貴族の若者を国費で留学に派遣していたが、国力の増大とともに、自前で子弟を外遊に出す貴族が増えてくる。18世紀には、グランド・

ツアーはイギリス貴族の通過儀礼として確立する。

- 目的地：フランスとイタリアは必須である。フランスでは、ルイ14世以来ヨーロッパ中の宮廷人の手本となっているフランス貴族と交際し、彼らの優雅な立ち居振る舞いや会話の術を体得する。また、全ヨーロッパの上流階級の共通語であるフランス語をマスターする。イタリアでは、各地の宮廷を訪れて社交の術にいっそうの磨きをかけるとともに、ローマ帝国の遺跡やルネッサンス芸術の精華に触れて審美眼を養い、イタリア語の修得も含めて幅広い教養を身につける。ドイツやオーストリアは文化的には二流国だと評価され含まれないのが普通であった。
- 旅行期間：短くて２～３年、長いと５～６年。
- 同行者：ちっとした貴族となると、御者、従者、牧師、家庭教師など合わせて10名前後にもなることがあった。家紋で美々しく飾られた四頭立ての馬車に、召使や荷物を満載した馬車が数台連なる。家庭教師（tutor,bear leader, governor）には、一流の大学を出た牧師や一流大学の教授が選ばれた。経済学の父・アダム・スミスも大学教授のポストを犠牲にして、1764年から3年近くバックルー公爵家の後継ぎの家庭教師として旅に出た。報酬の良いこととイタリアやフランスの学者との学問上の交流がその動機だった。
- 旅行費用：18世紀末に、２万エーカー以上の土地を持ち、そこからの年収が１万ポンドという貴族の数はイギリス全土で400人に達していた。1642年刊行の欧州大陸のガイドブックによれば、グランド・ツアーの費用は若様１人につき年300ポンド、召使１人年50ポンドと算定している。しかし、これは最低限の生活費であり、大半の若様にとっては一生に一度の外遊であり、青春を楽しむ最後の機会だったので、３年～５年の外遊で１万～１万５千ポンドも使ってしまうこともあった。
- 家庭教師の報酬：アダム・スミスの場合年俸300ポンドだった。また帰国後は300ポンドの終身年金が保証されている。300ポンドは、グラスゴー大学教授としての彼の給料のほぼ倍額だった。おかげで彼は何の金銭上の心配もなく、『国富論』の執筆にうちこめた。このようにグランド・ツアーは、長期にわたる旅であるうえに、貴族としての体面もあり、非常に費用のかかるものだっ

た。

2－1－3　ジェントルマンの身分、価値観、生活

観光史に特筆されるグランド・ツアーを行なったイギリス貴族・ジェントリとはどのような階級であり、どのような価値観を持ち、どのような生活をしていたのだろうか。ここで、指昭博「人々を隔てる壁－ジェントルマンの支配する社会－[7]」松浦京子「生活のうるおい－「余暇文化」－[8]」（共に井野瀬美恵『イギリス文化史入門』を参考に列記しておきたい。

・当時のイングランド社会を大きく4区分すると、図-1のように、①ジェントルマン（上層の「貴族」と下層の「小貴族」すなわち「ジェントリ」に区分)、②市民(ブルジョア)、③ヨーマン、④レイバラーとなる。ジェントルマンの頂点は国王、その下に貴族というのは他の西欧諸国と同じだが、15世紀のバラ戦争によって多くの貴族が断絶したこともあって、貴族の数がきわめて少ない（ほぼ200家族以下）なのが特徴。また、基本的には広大な所領に在住する領主であって、フランスのような宮廷貴族ではない点も特徴の一つである。

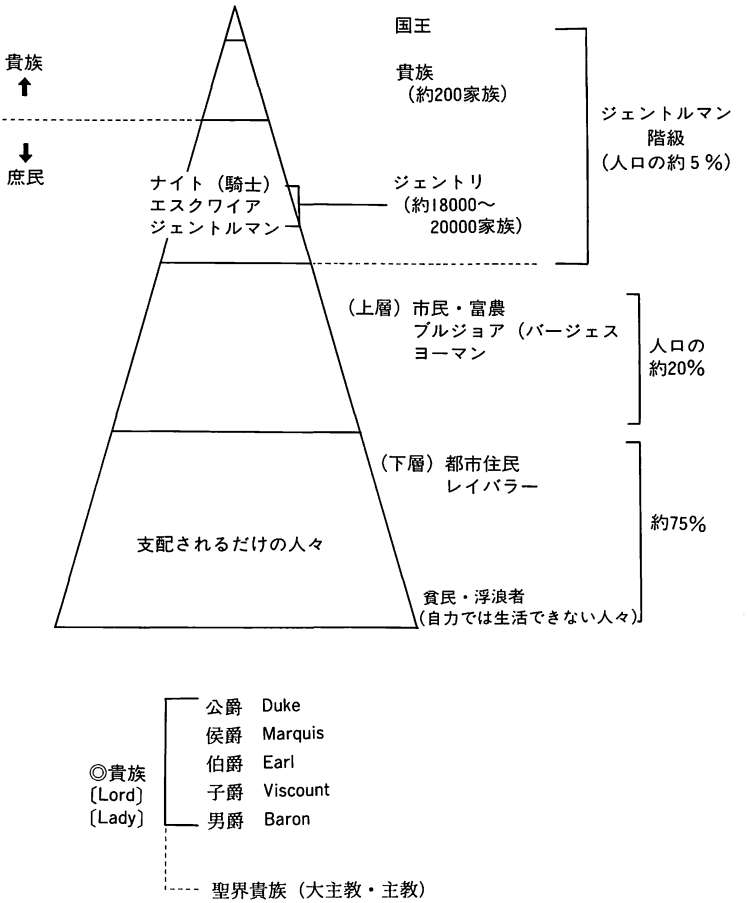
・貴族階級だけで国民全部を押さえるのには小人数すぎた。そこで「ジェントリ」階層が意味を持つようになる。ジェントリは身分的には爵位を持たない庶民であるが、貴族同様、広大な土地を所有する地主であり、その居住地域社会においては多大の影響力を行使し、庶民院議員の選挙を通じて国政にも参加することができた。貴族とジェントリを合わせた「ジェントルマン」階級は人口比5％程度であった。

・ジェントルマンの下には、ギルドの構成員である親方など「市民権」持つ都市の自由市民や富裕なヨーマンのような自営農民からなる「有産層」が人口の約20％を占めていた。自由市民も自営農民も地域行政に参加することや地域によっては庶民院に議員を選出する権利を持っていた。

・人口の75％を占める「一般民衆」を構成するのは市民権を持たない都市住民やレイバラー（日雇い労働者)、サーヴァント（奉公人)、小屋住み農（コテイジャ）である。

・爵位を持つ一握りの貴族以外は、ジェントルマンといっても明確な身分が規

図－1　近世イギリスの社会構造



井野瀬久美恵「イギリス文化史入門」より転載

定されていなかったので、他人からジェントルマンと認められることが重要であった。一般的には「財産に基づく収入＝地代収入で生活し肉体労働を行なわない」「所領での邸宅（カントリー・ハウス）での生活」「家事使用人の雇用」「御者つきの馬車の使用」「ジェントルマンと一目でわかる服装・身な

り・しゃべり方」がその基準となった。

・ジェントルマンのレジャーは、人に見せつけるもの、同じ階級の人々によって認知されそれ以外の人びとから憧れをもって眺められるものでなければならなかった。これも彼らの身分の曖昧さからきている。自らの社会的地位を示すためには「衒示的」なレジャーと消費の実践で他との差をつける必要があった。たとえば「社交シーズン」はそのための舞台であった。

2－1－3　温泉から海浜リゾートへ

イギリスで伝統的リゾートといえば常に水辺、内陸部の温泉リゾートと海岸の海浜リゾートである。これらはもともと貴族・ジェントリが自らの目的のために開発し、しばしば「衒示的」に用いたものである。以下その軌跡をなぞってみたい。

2－1－3－1　温泉リゾート・バース

その名が入浴・風呂の普通名詞になったほど著名な温泉地・バースについては、角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国[9]』に詳しいので、他の資料と合わせて要点を記述しておきたい。

・バースは、ローマによるブリテン支配下時代にローマ人によって見いだされた。「全ての風呂はローマに通じる」（ローレンス・ライト）の諺のように、ローマ人の行くところどこにでも公衆浴場が作られ、その湯浴文化はローマ帝国の拡大とともに東西に伝播した[10]。バースもそのうちの一つであった。当時建設された浴場の遺跡は発掘されて現在も見ることができる。

・中世以来温泉場は、癩患者、天然痘、疥癬患者たちが湯治に利用する場所であった。温泉にはその享楽的雰囲気から生じる退廃した風紀が漂うことが少なくないが、中世にはバース市の中央に「僧院教会」を建設したベネディクト派の修道院があり、ここが温泉場を管理していた。

・16世紀中葉、ヘンリー８世が国内の修道会を解散させたときに、温泉の管理権はバース市に移管された。毛織物工業の不況に悩んでいた同市は、温泉をビジネスにしようと考えた。

・バース市は、浴場の管理・維持、入浴者へのサービスを行なう少数の係官を任命した。彼らの収入のほとんどは裕福な入浴客からの祝儀だった。中世以来の3つの浴場（キングズ・バス、ホット・バス、クロス・バス）に加えて、女性用、癩患者用、馬用の特別の浴場が1576年までに完成した。
・市の積極的誘致と医者の温泉療養の宣伝効果により、湯治客がバースへ来るようになった。
・1677年、チャールズ2世と王妃が子授けの効験の噂にひかれて、バースにやってきた。その後彼は何人もの愛人を帯同するが、これは物見遊山が目的である。ジェームズ2世やアン王女も訪れるが、アン王女はとくに熱心で大勢の廷臣たちを引きつれてきたので、宮廷ごとバースへ移ってきたような賑わいとなった。
・王室は僧院教会を行在所としたが、市のインフラや娯楽施設はきわめて貧弱であり、なにかと物騒でもあった。
・ボーフォート公爵はバースの状態をみて、訪問客の「もてなし（エンターテイメント）」全体を管理運営する「マスター・オブ・セレモニー（＝宮廷の儀典長、命名はユーモア？）」を置くことにした。
・2代目「儀典長」リチャード・ナッシュ（1674～1761、ロンドンの社交界で「伊達男（ボウ）」の異名をもつ）が1705年に就任、たてつづけに改革を実行した。まず、以下のような新らたな施設を建設した。
　a．常設の小劇場（1705年）。
　b．ダンスと賭博のための集会場（1706年）。
　c．キングズ・バスに隣接して食堂やコンサート室をもつポンプ・ルーム（1708年）。建設費用は市民から徴収し、施設は市営財産になった。
・建築家ジョン・ウッドが中心部（クイーンズ・スクエア～キングズ・サーカスにいたる一画）を設計した。「バースに古代ローマをよみがえらせる」がテーマであった。この結果かつての田舎町が「イギリスのフィレンツェ」と呼ばれる優雅な都会へと面貌一新した。
・ナッシュは、ロンドンの社交界での「よき振る舞い」（洗練された社交マナー）をバースに持ち込むための11ヵ条の「全員の同意によって決定された規則」

を制定し、ナッシュ王国の憲法とした。規則の骨子は、乱暴狼藉の禁止、正装厳守、婦人への礼節である[11)12)]。

・バースは「もうひとつの環境に移されたロンドンの生活」の舞台となった。バースへの来訪者名簿は貴族・上層ジェントリの名簿でもあり、ロンドンの流行は数日後にはバースにもたらされ、バースの流行がロンドンの流行となった。冬になると貴族たちは、流行に遅れないようにと、飛ぶようにバースへやってきた。

・こうしてバースでの遊びが流行を越えて上流階級の習俗として定着していった。

・バースでの１日は次のようであった。

a．バース街道から入市すると、旧僧院教会の鐘の音が迎える。到来者があるたびに鳴り全市に告げる（鐘つきのために半ギニー）。

b．宿に到着すると、舞踏会や音楽会に参加する会費（2ギニー）、集会堂の外の遊歩道の散策する権利(身分に応じて5シリング～1ギニー)、貸本屋で本を借りる、コーヒーハウスでペン、インク、紙を借りる(各々5シリング～半ギニーまでの会費)。バースの経済は寄付・会費制度（ともにsubscription）を基礎として成り立っていた。

c．１日は朝６時にはじまる。９時までの間にポンプ・ルームで入浴し鉱水を飲む。宿からポンプ・ルームまでは籠椅子。そのまま湯に入ることも可能（距離に応じ酒手）。

d．朝食まではコーヒーハウスでロンドンから届く新聞を読む。朝食はポンプ・ルームに全員出席のうえでとる。

e．ときにはコンサート、レクチャー、教会での礼拝。

f．午後には散歩、帽子屋・玩具屋をひやかす、馬車・乗馬で郊外へ、貸本屋・コーヒーハウスなどまちまち。

g．早めの正餐。教会で夕べの祈り。ポンプ・ルーム。

h．夜は集会堂でのお茶。劇場・賭博場・舞踏会場で更ける。

i．正11時にすべてが終了。いっさいの公的娯楽が禁止となる。

人びとは1日に何度も同じ顔に遭遇し親密さを増す。「友達づきあいと気晴ら

しこそがこの土地の仕事なのだ」(タイム・テーブルに書かれた標語)。「バースの王」が君臨し「バースの法」が支配する特別の空間にあっては、「上は高貴のお方から下は賤しい商人にいたるまで、皆ごちゃごちゃにいり混じって、それこそ無礼講で互いに挨拶を交わす」。行動と服装の画一性が、貴族社会に入る異分子に、一時的で擬制的な資格を与えた。これが、蓄財した資産家が地主社会に融合し貴族たちと交際することを容易にした。バースでは、混浴がおこなわれるなど、男性社会と女性社会が最接近した。ここは零落したジェントルマンの子弟と資産家の娘との結婚市場でもあった。

バースのもつ見せかけの均一性、画一性が失われたとき、バースは社会的機能を失なった(1811年頃)。バースでの生活、機能、没落は、同じ頃イギリス各地に誕生した、バクストン、ハロゲイト、タンブリッジ・ウェルズなど数多くの温泉リゾートでも採用された。

2－1－3－2　海浜リゾート・ブライトン

この間、貴族・ジェントリたちは、温泉リゾートから海浜リゾートへと鞍替えをしたのだった。これも角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国』などで概観しておきたい。

- イギリスでは海水浴は銷夏法ではない。たとえばスカーバラ(温泉町でもあった）は寒冷なヨークシャー海岸にあり、冷水に身体を沈めることが病気をなおす効果があると信じられていた。スカーバラは、ウィッティという医者が海水を飲み水浴せよと提唱したのがきっかけで開発された。
- 英仏海峡に面したイングランドの一寒村、ブライトヘルムストン（後にブライトンと改名）に1750年に住みついたリチャード・ラッセルという医師が、海水浴が健康によく、病気療養にも最適だとの説を唱えた。ラッセル医師は宮中にコネがあり、ジョージ3世の皇太子（後のジョージ4世）の耳にこれが入った。
- 1782（または3）年に、皇太子がブライトンを訪れた。気に入ってその後も度々足をはこび、1787年には外見イスラム寺院、内装中国趣味の離宮・ロイヤル・パビリオンを建設した。

・皇太子ジョージは、父であるジョージ３世が病気のため摂政皇太子として実権を握り、バッキンガム宮殿の改築、ウィンザー城の大改造、別荘カールトン・ハウスの建築、ロンドン中心部の大都市改造などを行なった実績がある。また、文学・芸術もよく理解した。時代の寵児として、ロンドン社交界と宮廷を支配するダンディの総元締めボー・ブランメルを見いだしたのも彼であった[13]。
・この離宮を拠点とする皇太子ととりまきのダンディなライフスタイル（放蕩と歓楽生活といってもよい）が評判になり、ブライトンの名が全国に知れわたるようになった。やがて、ブライトンはバースの後継地として認知される。
・ブライトンと同じく18世紀に誕生した、スカーバラ、マーゲイトなどの海浜リゾートも、温泉リゾート・バースにおけるナッシュの運営方法を引き継いだ（集会堂、会費制の舞踏会、遊歩道、巡回図書館、オーケストラ、公演、ダンスやカードを統制する厳格な規則、「儀典長」、鐘、共　同朝食など）。海浜は海岸に場所を移された温泉だった。温泉の全盛期には人に忘れられたひなびた漁村だったが、王室の愛顧を得たことで保養地（ヘルス・リゾート）が行楽地（プレジャー・リゾート）に転換した。バースで起こったことが100年後のブライトンに再び起こったのだった。

２－２　中流階級による「ツーリズム」の成立

２－２－１　貴族のツアーから中流階級のツーリズムへ

海浜リゾートでの休暇は、産業革命以降新たに勃興してきた商人や専門職層など中流階級も真似るところとなった。彼らは「浸礼」を元気回復剤のように信仰した。

ロンドンの中流階級は、まずケント州のマーゲイトに目を付けた。この小さな港町は、ラッセルに学んだＪ.Ｋ.レトソン医師が海水浴療養所を開設し、1750～60年代にかけてその「海の福音」がロンドンで宣伝された。海風、良い食事、運動、リラックス、冷温水浴と海水飲用の海水療法の効果は、大都市住民の関心をひきつけた。1815年以後、テームズ河のロンドン・マーゲイト間の蒸気船が新たな局面を開いた。汽船会社６社の間でが運賃値下げ競争が起こり、

1820年の12シリングが1840年には5シリングにまで下がった(『リゾート列島』)。

ロンドン・ブライトン間には、1841年に鉄道が開通しわずか2時間で結ばれた。中流階級は、ブライトンへも行くようになった。開設当時1日上下13本だった列車は1953年には1日24本、61年には32本に増加する。料金も1841年の開設当時で、1等片道14シリング7ペンス、2等9シリング6ペンス、通用1日限りの往復切符1等20シリング、2等15シリングと駅馬車の片道21シリングと比べすでに割安であった。(同)

貴族たちはこうした新参者と混じることを嫌い、二シーズン制がとられるようになった。冬は避寒目的の上流階級が独占し、夏は中流階級でごったがえした。(同)

前述のグランド・ツアーについても、18世紀後半になると、専門職につく中産階級の子弟も行なうようになる。同世紀末には、ちょっとした金持ちで夏の間1ヵ月ほどを欧州大陸を馬車で見物してまわらない者はいないといわれるまでになる。「イギリス人とドイツ人が世界中でもっともよく旅に出る人々である。アルプスを越える50人の旅人のうちイギリス人は30人以上…」(ライハルト)との記録もある。(『グランド・ツアー』)

旅行者の増加と並行して旅のスタイルも変わってゆく。貴族の若様の大名旅行とは正反対の貧乏旅行である。「7月14日の夕方カレーを出て以来、出費は2人合わせて12ポンド以上にはなっていない。旅ほど質素倹約を学ぶのにいいチャンスはない」(詩人のワーズワース，1790)。(同)

19世紀になると旅行は便利になる一方であった。1821年には蒸気船がドーヴァーとカレーの間の定期便に登場し、1828年にはフランスで鉄道線路の敷設がはじまり、1844年には鉄道線路はスイスに達した。さらにスイスとイタリアを結ぶシンプロン峠とモン・セニ峠を越える近代的な道路がナポレオンによって建設された。そして、1845年には、トーマス・クックによって、団体旅行を組織化して交通機関や宿泊施設に斡旋することを専業とする旅行代理業(当時はexcursion agentと呼ばれた)が営業を開始する。

19世紀中葉の中流階級を中心とする旅行者の増加は、旅行上の便益を提供して利益を得ることを目的とし、交通業・宿泊業・旅行業などからなる観光産業

を誕生させた[14]。楽しみを目的とした旅行は、貴族・ジェントリなどエリート階級の個別的・特殊的な旅である「ツアー」から中流階級を中心とする組織的・一般的な旅である「ツーリズム（観光）」へと発展するのである。

観光産業の発達によって、小金のある人間ならだれでも簡単に観光に出かけられるようになり、楽しみのための旅行がエリート階級の独占物である時代は終わった。しかしその後もイギリスのジェントルマンたちは、ニースをはじめとするフランスの地中海岸を舞台にした優雅なリゾートライフの展開など、観光のさまざまな要素に大きな影響力を発揮し続ける。また、イギリスの中流階級も、交通など観光の便益については新たに登場したコマーシャリズムの助けは借りたが、観光の内容として求めるものは、ジェントルマン階級に劣らぬ「豪華さ」だったのである（後述）。

フランスの科学冒険小説家ジュール・ヴェルヌ（Verne,J）が旅行小説『八十日間世界一周（Le tour du monde en guatre-vingt jours）[15]』を執筆した1873年の時点では、すでに陸路ではヨーロッパの鉄道網が急速に発展を遂げ、アメリカ大陸でも大陸横断鉄道が開通（1869年）していた。また、海路では太平洋・大西洋とも定期船が就航していたのに加え、スエズ運河の開通（1869年）は、航路でのヨーロッパ・アジア間の所用時間を大幅に短縮している（表－１）。

表１　フォッグ卿の「世界一周旅行」の利用交通機関と所要日数

ロンドン～スエズ（モン・スニ峠、ブリンディジ経由、鉄道と郵船）…７日
スエズ～ボンベイ（郵船）…13日
ボンベイ～カルカッタ（鉄道・大インド半島鉄道）…３日
カルカッタ～香港（郵船）…13日
香港～横浜（郵船）…６日
横浜～サンフランシスコ（郵船）…22日
サンフランシスコ～ニューヨーク（鉄道）…７日
ニューヨーク～ロンドン（郵船と鉄道）…９日　（総計80日）

『80日間世界一周』より

2－2－2　中流階級の価値観と生活

19世紀中葉にはじまるツーリズムは、その後普及の諸条件がさらに整い、労働者階級を含むだれでもが観光をする「マス・ツーリズム（大衆観光）」の時代を迎えることになる。最初のマス・ツーリズムは、新たな社会活動としては珍しく、イギリスの産業労働者の間に発生した。これには中流階級にとってジェントルマン階級の影響が大きかったように、労働者たちのすぐ上の階級である中流階級の理念や価値観、生活の影響が大きかった。松浦京子「社会の規範[16]」、同「生活のうるおい[17]」を参考に、以下に要約しておきたい。

なお、イギリスの「中流階級」の意味は、もともと、貴族・ジェントリよりは下で、労働階級よりは上のすべての階級ということで、具体的にいうならば、まず第一に、産業革命の主役ともいうべきブルジョワ階級、第二に法律家、聖職者、陸海軍の士官、高級官吏、さらには、技術者、教師、芸術家、文筆家といった人たち、ついで第三に、借地農、農民、そして第四に、これは、20世紀になってから使われるようになった言葉だが、「下層中流階級」の人々、つまり、小売業者、下級官吏、事務員、書記などが含まれていた。もっとも時代の推移とともに、上流、中流階級という言葉の意味が少しずつ変わっていったし、何を基準にするかで分類に多少の変化が生ずる[18]。

- ヴィクトリア時代（1837～1901）は、産業革命以後興隆した中流階級がその経済力を背景に勢力を強め社会の中枢を占めようとしていた時代であるが、同時に、旧来の支配階級であるジェントルマン階級が依然として大きな政治力を持ち、一方で、労働者階級が形成されて、中流階級との違いが明らかになった時代だった。
- このため中流階級は、他の階級との区別をはっきりさせることと新興の階級にふさわしい理念・価値基準を強く求めた。自分の能力を信じてプライドを高く持つことにつながる「リスペクタビリティ（尊敬されるに値すること）」はとくに重要だった。それは「労働」の価値の崇拝を中心に、勤勉、奨励努力、自己を鍛える忍耐、分を越えた贅沢を戒め倹約に価値を認め、独立独行を尊ぶ「自助－天は自ら助くる者を助く－」の精神であった。
- 勤勉・自助に価値を置く考え方は、ヴィクトリア時代の中流階級、とりわけ

実業家層にとっては、道徳的にも経済的にも好ましい価値観、信条であった。「才能よりも気力・活動力のほうが大きなことを成し遂げる」という言葉に示される考えは、企業家や技術者たちにとって励ましとなるものだったからである。そのうえ勤勉・自助を信奉することは、そのまま人格形成につながるとされ、また、成功の手段であるとも考えられ、さらには、社会の進歩は究極的にはこの信条の実践にかかっているとさえ論じられた。

・リスペクタビリティは、尊敬という感情をいだく他人を想定し、他人の目を意識する理念だったから、精神的な側面ばかりでなく、人にはっきり見える物質的側面＝消費生活の面にも現われてくる価値基準であった。

・リスペクタビリティの実現には女性がかかわる規範もあった。それは「家庭崇拝、家庭の神聖」の価値観・規範である。女性には、理想の家庭、神聖なる家庭にふさわしい役割が求められていた。また、夫や父親の経済能力（それは勤勉・自助の成果である）を証明する「アイドル・ウーマン」としての役割もあった。

・18世紀後半からの工場労働では、労働時間が厳密に管理され、その結果余暇時間が明確に分離されるようになる[19]。中流階級の場合、職種により労働時間の差は大きいが、専門職や公務員では一貫して短く、午前10時から午後4時までが平均であった。また1875年ころになると、中流階級には、年次有給休暇の導入も行なわれている。

・中流階級のなかの実業家層は、自分の雇った者たちに長時間労働強いたのだが、当初は彼ら自身も朝早くから夜遅くまで刻苦勉励した。彼らは「勤勉は美徳なり」の社会規範を代表する人びとであった。しかしながら、第二世代、第三世代と進むにつれて、労働時間は短くなり、9時から5時が標準となった。

・余暇時間の増加を背景とする、中流階級のレジャーは大きな変化をみせながら都市的な文化として発達する。

a．19世紀前半まで：真面目を特徴とする。各地の都市に劇場を増やし、アッセンブリ・ルーム、図書館などを開設することに熱心であった。彼らは、レジャーは知的に充足する機会であると捉えていた。快楽的なレジャーを低く

見る傾向が強く、18世紀に発達したコーヒー・ハウスでの社交性に富むレジャーも活力を失った。中流階級にとって「家庭尊重」が重要な規範だったので、家庭でくつろぐという慎ましいやかなレジャーが強調されもした。

b．19世紀半ば：知的なレジャーへの志向は一層進み、社会問題の解決のために、労働者階級を対象とした博愛主義的活動や禁酒運動などの改良運動が盛んになった。

c．19世紀後半：「ヴィクトリアの繁栄」のなかで富と力を強めた結果、中流階級の謹厳な雰囲気もゆるんでくる。贅沢なフランス料理、自家用の馬車、レジャーでは自宅でのパーティ、芝居や音楽、海浜リゾートで2、3週間を過ごす「ホリデイズ」も年中行事となった。彼らはジェントルマン階級の消費的価値観を実践した。これには彼らの上昇志向の強さが大きく関係した。浪費的生活は経済力によって裏打ちされた「リスペクタブル」な生活の証明と考えられたのである。

・巨額の富を得た実業家のなかには、ジェントルマン階級に近づくべく土地を購入して実業界から遠ざかっていった者もあった。前述のように、ジェントルマンは明確な身分ではなかった。本来的な家柄を誇る地主・貴族でなくてもジェントルマンであると見做され得たのである。ここにイギリスのジェントルマン志向の強さの秘密があった。

・中流階級は余暇に新たな意味を見いだしてもいた。余暇とは明日のよりよき労働のために人の活力を再生産（re-creation）するためのもの。それゆえ当時は leisure より recreation という言葉のほうが好んで使われた。スポーツも盛んになった。中流階級の子弟の教育の場であったパブリック・スクールでは、とくに団体スポーツが奨励された。「学内の秩序の維持としつけ（鍛練）に大きく役立つ」ものとしてスポーツは重要視されていた。時代が進むにつれて、スポーツはティーム・スピリットを通して、イギリス帝国の経営に携わる者にふさわしい愛国心を育て、また戦争時の戦術訓練にもなると期待されるようになった。

2－3　労働者階級を含む「マス・ツーリズム」の成立

18世紀までは、活力ある民衆レジャーの舞台は農村であった。そこではフェストや徹夜祭、フェアなどが日々の生活に密接に結びつき、すべての住民が参加して行なわれていた。祝祭日ともなれば、モリス・ダンス、ボウリング、パントマイムを楽しみ、時には熊いじめに興じた。酒が入れば乱痴気騒ぎとなり民衆エネルギーは爆発、ストレス解消の場となった。しかし同世紀末になると、農村のこんな伝統は崩れはじめる。土地の囲い込みの進行、労働の長時間化、「農村のレジャーは堕落だ」などの非難が圧力となり、民衆レジャーの活力は失われ壊滅が進んでゆく。そして民衆文化の重心は都市へ移っていったのである。

2－3－1　国民所得の増大とレジャー産業の成立

工業化の進行により「労働」と分離された「余暇」が明確に意識されるようになる。だが、工業化初期の段階では、労働者たちの余暇は増加どころか、逆に大幅に減少してしまう。18世紀半ばまでのイギリスにおける大半の産業の労働時間は、朝6時から、2時間の食事時間をはさんで、夕方6時までであった。だが、産業革命初期における実業家（中流階級）たちは、生産高を引きあげるために、労働者に対し厳しい規律を課していく。とくに、精勤や時間厳守に関しては細かな規定が定められ、違反者には容赦ない罰金、罰則が科された。19世紀前半の繊維工業労働者の1日の労働時間は12～13時間となり、炭坑で12時間、農業労働者も工場労働なみの労働時間があたりまえになった。また、祝祭日の休みもほとんど無視されてしまう。（『「非労働時間」の生活史』など）

「世界の工場」に向けてのイギリスの産業経済拡大の時期、国をあげて精励勤勉をめざしたその結果、19世紀の100年の間に、イギリスの1人当たり実質国民所得は4倍になった。これほどの発展を遂げることができたのは、ひとえに自己に対する自信、未来への希望と確信といった心意気が国民一人ひとりの間に溢れていたからだろう[20]。このため工場労働者を含む一般大衆の経済福祉も大幅に進んだ。彼らは1回休暇をとったあと、次の休暇に備えて貯蓄ができるようになった。当時はまだ労働者に有給休暇がなかったので休暇のための貯蓄は

欠かせなかった。

大衆の所得増大と急速な都市化により、大衆余暇活動（マス・レジャー）が生まれる。都心部には劇場、コンサートホール、競馬場などそれまでにない施設が次々に建設される。これら施設への投資が、経済的に充分ひきあうほど利用され利益を生むようになったのである。イギリスではこうして「レジャーが商品」になった。レジャー産業が成立したのである。その後も商業化は大衆のレジャーを加速していった。（『路地裏の大英帝国』など）

２－３－２　正しいレクリエーション運動とトーマス・クック

前述のように、中流階級は勤勉・自助に価値を置き、それを道徳的にも好ましい価値観であると考えて、労働者階級に対して禁酒運動をはじめとする社会改良運動を積極的に行なった。とくに深酒で休日を過ごすかわりに海浜での行楽を楽しむことは、「正しいレクリエーション・合理的レクリエーション」として推奨されたのである。（井野瀬美恵『イギリス文化史入門』など）

トーマス・クック（Cook,T）もそうした禁酒運動家の一人であった。彼は元来、苦学力行の人であった。肉体労働から職人仕事など転々とした末、バプティスト派の伝道師として労働者たちの信仰上のリーダーになった。1841年、彼は地元レスターの禁酒同盟の書記となったが、その年の７月、20kmほど離れたラフバラで地域の一大禁酒大会が挙行されることになった。厳しい労働に耐えるためには、強い酒を飲むことで頑丈な身体に鍛え上げる必要があると信じている労働者たちに、酒の害を説いて回る巡回伝動の中で、彼は一つのアイディアを思いついた。それは当時まだ珍しかったＳＬ列車の旅と禁酒大会参加をパッケージにした、世界最初の包括旅行（inclusive tour）を組織するというものであった。彼はミッドランド鉄道に貸切列車の交渉を申し入れ、ノーマル運賃の半額で往復切符を仕入れるのに成功した。このパッケージに570人が集まり、禁酒大会は大成功であった。これが契機になり彼は1845年、世界最初の旅行代理業トーマス・クック＆ソン社を開業する。クックは、その後も、労働者向けの海浜リゾートや温泉旅行の団体パッケージ・ツアーを多数主催している。（水野潤一『観光学原論[21)]』）

酒飲みでなくても、海浜の降りそそぐ陽光、まじりけのない空気、オゾンは魅力である。とくに19世紀中ごろのイギリス人は、だれかれなく汚染された空気への恐怖症に罹っていた。医者は療養のために海岸への転地をすすめた。海岸への行楽は都市からの臨時の脱出行だったのだ。博愛主義的な工場経営者が自ら遊覧列車を組織し海岸に引率したのも、それが労働者の健康に不可欠であると考えたからである。19世紀の後半、ブライトンに与えられた異名は「首都の肺」であった。(『路地裏の大英帝国』など)

1860年代になると「粗野な」労働者階級を「正しいレクリエーション」で矯正するという考え方は、雇用者、中流階級の改革者、国家のあいだにも広がりをみせる。正しいレクリエーションとは、教育的な訓練、体育、工芸、音楽教育、遠足などである。このころ盛んになった恵まれない町っ子のための田舎への行楽や、青少年運動(ボーイズ・ブリゲイド、スカウト、ユダヤ人青年団など)により企画されたキャンプの実施も同じ趣旨によるものである。(ジョン・アーリ『観光のまなざし[22)]』)

2－3－3　海浜リゾートでの休暇

19世紀後半になると労働が一部で合理化され、労働時間は除々に減少する。イギリス議会は、労働者に対するさまざまな保護条例を導入している。とりわけ重要だったのは、土曜日の半ドンの導入であった。さらに長い休暇、1週間単位の休暇はイングランド北部、とくにランカシャーの綿織物工業地帯で先駆的にはじまった。工場主は<ウエイクス・ウイーク(徹夜祭週)>を正式の休暇期間として認めるようになった。期間中工場全体を休業したのである。

そのころになると、雇用者の間にも、正規の休暇は労働効率にプラスになるとの見方が浸透する。これと強い労働組織を持つ北部の労働者の圧力が結びついて、ウエイクス・ウイーク休暇は実現した。労働者側は、休暇の獲得が自由なレクリエーションにつながると考えていた。とはいえ当時は、基本的に、行楽は集団で楽しまれるべきだと考えられていた。ウエイクス・ウイークの休暇もクリスマスやイースターと同じように“アン・マス(一団となって)”で取られ、共同体全体で祝うべきであるとの見解が支配的だったのである。1860年代

以降、ウエイクス・ウイークには日常の住宅地から遠く離れて、海浜で休暇（シーサイド・ホリデイズ）を過ごすという習慣が、ランカシャー以外の都市にも普及し、定着して行く。（『観光のまなざし』）

交通学者の新城常三は、庶民の旅の歴史を「内部強制の旅（交易のためなどの生きるための旅）」「外部強制の旅（権力による使役のための旅）」そして「自ら好んでする旅（観光）」の段階に分けてとらえている。それまで内・外部強制の旅以外に、何かを観にどこかへ旅ををすることなどなかったイギリスの労働者も、19世紀中ば以降「自ら好んでする旅」、すなわち「観光」を行なうようになった。そのための前提条件は、以上のべたように、所得の増加、余暇の増加という観光者自身の経済的条件から、レジャー・観光産業の発達、中流階級などからの社会改良運動の働きかけ、都市環境の悪化、労働組合活動など多様な要素が複合的に重なったのである。（新城常三『庶民と旅の歴史[23]』など）

マス・ツーリズムが発展するについては、交通の改善が大きく貢献した。18世紀末にはバーミンガムからブラックプールまでの旅は3日かかった。マンチェスターからでもブラックプールまで丸１日かかった。馬車があってもほとんどの道路が悪路であり、また料金も高かった。1810年代にブラックプールを訪れるには、思い切って贅沢して二輪馬車を利用するか、60km以上あるマンチェスターから丸１日かけて徒歩で行くしかなかった。鉄道の実用化のはじまる1830年代初頭には鉄道会社は大衆需要の潜在的大きさを過少評価していた。経営の重点は、貨物輸送と裕福層の旅客運送に置かれていた。しかし1840年ころになるとプレストン・フリートウッド間に庶民客が多くなった。彼らはフリートウッドから海岸沿いに南下してブラックプールの海浜リゾートに向かったのだった。加えて1841年のロンドン・ブライトン間の遊覧列車の開始が鉄道の大衆化を確実なものにした。1844年にはグラッドソンの鉄道法が制定され、鉄道会社の「労働従業者階級」への便宜が義務づけられた。同年8月には、38両の車両からなる遊覧列車が、労働者を中心とする1,700人の乗客をフリートウッドへ運んだ、との新聞記事（『プレストン・クロニクル』）が残されている。いっちょうらに身を固め、楽隊を先頭にした労働者とその家族は、1840年代のランカシャー鉄道を象徴する風景になった。鉄道会社は、休日には臨時・遊覧列車を運航させた。

乗客は、40両以上も連結させた無蓋車両に立錐の余地もないほどにすしづめにされた。当然、料金は格段の安さであった。「ブライトンまで行って帰って3シリング半」という文句が1850年代の流行語だったという。(『路地裏の大英帝国』など)

3　ツーリズムの発展と海浜リゾートの衰退

20世紀に入っても、イギリスのツーリズムは力強い発展をみせ、観光産業はイギリス経済において重要な位置を占めるようになった。しかし、いったんは伝統的レジャーとして定着するかにみえた海浜リゾートでの休暇は、今世紀半ば以後、衰退の一途である。こうした一連の構造変化がどのようにして起こったかを、以下考察する。

3－1　海浜リゾートの必然性

イギリスのマス・ツーリズムは、海浜リゾート中心に成立し発展した。これには必然性があった。

前述のように、海浜リゾートが普及する以前、18世紀のリゾートは温泉であった。温泉療養がその目的だった。イギリスで最も早く開発された医療用の温泉リゾートはスカーバラである。1626年に、ファーロウという女性が海岸に源泉を見付け、医者たちがその水を飲む、あるいは湯治をすれば健康によいと提唱した。

スカーバラは海辺にある温泉地である。ウイッティという医者が今度は、スカーバラの海水を飲み、水浴することを推奨する。このころ勃興してきた商人や専門職が、その医学的効能にひかれてやってきたので、18世紀の段階ですでに、海浜リゾートの利用者はかなりの数になっていた。しかし当時の「浸礼」を中心とした海水浴は、その後に普及する水泳とは異なるものである。医療効果の点から、水が冷たい冬がシーズンだった。

このように温泉も海浜も、ともに医療を目的としてスタートしたものだが、温泉は比較的社会的に特殊な場所であり続けた。利用者は、温泉リゾートに施設を所有するか借りるかができる裕福層に限られたからである。また、リゾー

トの規模も小さく自給自足的であった。

しかし社会的に優位な階級でも、海浜を占有しつづけることは不可能だった。海浜リゾートの収容力は無限ともいえるほど広かったし、そこにどのような階級の人びとが来ているかなどもほとんど問題にならなかった。すぐ隣にいる人に対してもそしらぬ顔で勝手に動き回ることができるのである。

イギリスで海浜リゾートが発展する要因の一つは空間だった。イギリスには長い海岸があるが、漁港として以外はろくな用途がなかった。海岸線や海浜は、満潮と干潮の差の部分が王室の管理地域だったので、民間ベースでどうこうできるものでもなかった。

はじめは上流階級専用、その後は冬は上流・夏は中流の2シーズン制がとられていたブライトンにも、1870年代からは労働者層が押しかけるようになった。前述のように鉄道便の開設が引き金になった。その他の海浜リゾートもおおいに発展し、イギリス国内の主だった48の海浜町の人口は1861年から71年間の間に約10万人増加し、世紀末にはさらに倍以上になっている。1911年までに、イングランドとウェールズの人口の55%は少なくとも年1回は海浜リゾートへ行き、20%は長期滞在者だと推計された。(『観光のまなざし』など)

工業の発展により都市化が急速に進み、イギリス国内には極端な過疎地と過密地が生まれた。前述のように、人口が過密な工業都市の住民は、だれかれとなく汚染された空気への恐怖症に罹っていた。降りぞぞぐ陽光、まじりけのない空気、オゾンにあふれた海岸への行楽は都市からの臨時の脱出行でもあった。

ヨーロッパでは18世紀末から19世紀初頭にかけて、「ロマン主義」の思潮が興隆するが、その影響もあった。ロマン主義は文芸思潮に端を発し、情緒や自然の重視、超理性的なものや永遠に向かう傾向、創造的個性の尊重など、普遍的、理性的なものを理想とする古典主義に対立する思想として発展し、広く芸術・文学・哲学・宗教のあらゆる分野に及んだ。イギリスのロマン主義の布教者といえば、シェリー気取りやバイロン卿やワーズワース気取りである。このロマン主義のツーリズムへの貢献は、人はだれでも自然界にたいして感動できるのだという暗示を与え、風景は喜びをもってまなざしを向けることができる<何ものか>であるという暗示を与えたことである。個々人の楽しみは、印象にうっ

たえる天然の名所の観賞から生まれるはずだと考えられた。ロマン主義には、新興の産業都市の住人たちは、そこから短期間でも離れて自然を眺めて時間を過ごせて、大いに得をすることができる、という意味が含まれていたのだった。ロマン主義のおかげで、「物見遊山」が発展しただけでなく海岸線のすばらしさの観賞も行なわれるようになった。これは海水浴を奨励することにもなった。（同）

このような理由で、19世紀の観光のほとんどすべては「海」とその健康付与のご利益という自然現象に基盤を置いていたのである。

3－2　海浜リゾートのさまざまな展開

海浜リゾートが、マス・ツーリズム化するなかで、海浜リゾートでの過ごし方も変化してゆく。そこでは、温泉リゾート・バースや初期ブライトンのような、利用者の社会的均質性はみられない。代わりに小集団あるいは家族の休日である。リゾートを埋めつくしたのは、子供たちを自らの手で養育する人びとであり、主役は子供たちだったかもしれない。

当時はまだ水泳用の水着が考案されておらす、水浴機械（bathing machine）と呼ばれる一種の馬車に乗って波打ち際に運ばれるその間に衣類を脱ぎ、裸で水浴を行い、再び水浴機械のなかで服を着て海岸にもどるのだった。（『リゾート列島』など）

桟橋（ピア）も海浜リゾートにはつきものの施設だった。はじめは船着場としてつくられたものだが、やがて一大娯楽場となる。鋼鉄でできた桟橋の上に大暗室、日時計、大砲、土産や鉱水の売店、遊歩道、有料体重計が所せましと配置され、突端のパビリオンでは演芸や軽食が提供された。なかでもブライトンの西桟橋（1866年オープン）は、いちどきに2,000人を収容できる大がかりなものだった。

海浜リゾートは格段に騒々しい。子供達の歓声、バンド・スタンドで演奏するブラス・バンドやパンジョーの音、さまざまな物売りの声、それらが騒然一体となって耳に飛び込んでくるのだった。

前述のように、かつては限られたエリートのみが可能な、社会的ステータス

のシンボルでもあった観光は、19世紀後半にはだれでもできるものになった。ステータスの区分は、行けるものと行けないものというような区分から、行き先で区分されるようになった。観光者の趣味の違いが観光地の違いを形成し、各観光地の「階級」となっていったのだった。観光地としての内容にほとんど差がなくても、観光地ごとの「社会的色調」が定まっていったのである。

ジョン・アーリ『観光のまなざし』は、イギリスにおける海浜リゾートの階級化について、次のような事例研究を行なっている。

＜ウェストゲイトとバーチントン＞

・ロンドンの中流階級は、当初、マーゲイトやラムズゲイトなどケント州の海浜リゾート地を訪れていた。しかし1870年代になると、中流階級のなかでも上級といえる専門職などは、クリフトンヴィルやウェストゲイトに滞在することが多くなった。

・ウェストゲイトでは道路がすべて私道で、建物も一戸建以外は許可されなかった。イギリスではじめてのバンガロー（海浜別荘）はウェストゲイトに1869年に建設されたものだが、隣接するバーチントンに1870年代初期になって多数建設された。

・それまでのリゾート地は、公的な場所であり、集会室や遊歩道や公園やダンスホールなど海独特の公営建物群から構成されていた。普通の民家は海に背を向けた造りになっていた。海は漁をするためのもので眺めるものではなかったからである。

・清々しい空気と美しい景色を求めての海浜リゾートの人気が高まると、家族全員、とくに子供を連れて行ける施設が求められるようになった。他人と一定の距離を保ち、比較的独立して海を眺められる建物への要求が中流階級の間で高まっていたのだった。バーチントンには、公営の施設はなく、魅力的な海岸線があり、家を建てるにはぴったりだった。はじめての海浜別荘は田舎風に造られ、都市との対照性で人を惹き付けた。

・20世紀に入ると海岸地帯には広範な海浜風別荘ブームが起こり、これが中流の下の階級のニーズにつながってゆく。

＜ブラックプールとモアカム＞

・19世紀中葉まで、大きなリゾート地のほとんどはイングランド南岸にあった。利用者は中流階級の裕福層であった。南イングランドのリゾートは、全国の中流階級を顧客としていたのである。だからイングランドの南海岸から離れたリゾート地は、地元の地域的マーケットに依存せざるを得なかった。
・新たに都市化された産業都市には、公園とか広場のような公共スペースがほとんどなかった。古くからの都市と違って、住居地区は階級ごとの明確な区分がなされていた。人々の交際範囲は、どの階級においても内輪へ向かい、同種の人たちとのみ付き合うおうとする傾向、同じ利害・同じ趣味や教養・具体的なものはなくても倫理的に同種だと判断できる人とのみ交際する傾向が強くなっていく。これが地区と強く結びついたリゾートを誕生させる。多くのリゾート地は、こういう台頭する産業都市のある地区から特定の社会集団をひきつけることで成立したのである。
・20世紀になるとイングランド北部にも大きなリゾートが出来てくる。たとえば1911年にブラックプールがイギリスで5番目に規模の大きなリゾート地になり、リザム、モアカム、サウスポート、セント・アンズの人口が大きく増加した。労働者が利用するマス・ツーリズム観光地は、無趣味で、平凡で俗っぽいなどといわれながら、速やかで力強い成長をみたのだった。
・ランカシャー州北部海岸のモアカムは、ランカシャー州における上流リゾートの位置を狙っていた。しかしモアカムにはブラックプールという強力なライバルがあった。ブラックプールはすでに大規模なリゾート施設があったし、鉄道も乗り換えなしで便がよく、当時発展しつつあった州東部・南部の綿織物都市からも近距離にあり、日帰りでも利用ができたのである。
・労働者階級の休暇リゾート成長の要件は、工業都市にあるコミュニティとの紐帯であったが、ひとたびあるリゾートが、その産業後背地との関係を確立してしまうと、これらの工業地帯の労働者たちの行楽の伝統に組み入れられことになり、他の追従は困難であった。
・モアカムがランカシャー州の休暇市場の枠をブラックプールと争うのは不可能であった。だがモアカムへの鉄道路線は、ヨークシャー州の羊毛都市とも結ばれていた。モアカムへのリゾート客は、多くがヨークシャー州のウェス

ト・ライディング地区からやっきた。

・ウェスト・ライシング地区居住者のリゾート地となるためには、ヨークシャー州とリンカンシャー州にある東海岸のリゾート地との競合に直面しなければならなかった。しかし、モアカムは徐々に、がっちり屋で健康を愛するヨークシャー人との結びつきを強めてゆく。

・しかし、モアカムは中流階級の人びとを充分に惹きつけることはできなかった。日帰り客が増加して「無秩序で騒々しい」との評価が定着してしまった。また、モアカムには比較的小さな家が多く、民宿や小ホテルの営業が多かったが、これらはあまり裕福でないヨークシャーからの客用に欠かせなかった。

・19世紀末のモアカムは、急速に人口が増加し、回転塔など大きな施設への投資も行なわれた。だがその浮沈は、とくにヨークシャー州西部地域の景気次第だった。ブラーッドフォードの毛織物産業の好不況とモアカムのそれは連動した。

・両大戦間、モアカムは順調に発展した。労働者の有給休暇が普及し、休暇を海浜リゾートで過ごす習慣も伝統となったからである。1930〜40年代はとくに賑わい、モアカム市は新たな施設に対する投資を次々に行なっている。

3－3　海外パッケージ休暇の登場

イギリスでは1935年に有給休暇法が制定された。この法律は、被雇用者に毎年1週間の有給休暇を与えるものであったが、休暇期間は後に2週間、さらに3週間になった。このため1950年代には海浜リゾートでの休暇が国民的慣習となった。ついでながら最近の余暇取得実績では、被雇用者の99％が年間4週間以上、内25％は5週間以上の休暇をとっている[24]。

このような余暇時間の増加に、多くの場合可処分所得の増加が伴い、イギリスのマス・ツーリズムは目覚ましい成長を続ける。しかしながらイギリスの国内観光産業への効果は期待はずれのものであった。これには、多くの要因が関連しているが、アラン・ウイリアムス、ガレス・ショー『観光と経済開発－西ヨーロッパの経験[25]』は、過去25年間に、イギリスの余暇関連市場に影響を与えた主要要因として、以下の3項目をあげている。

①海外パッケージツアーの成長…これによりイギリス人の伝統的休暇スタイルともいえる国内海浜リゾートでの休暇が犠牲になった。

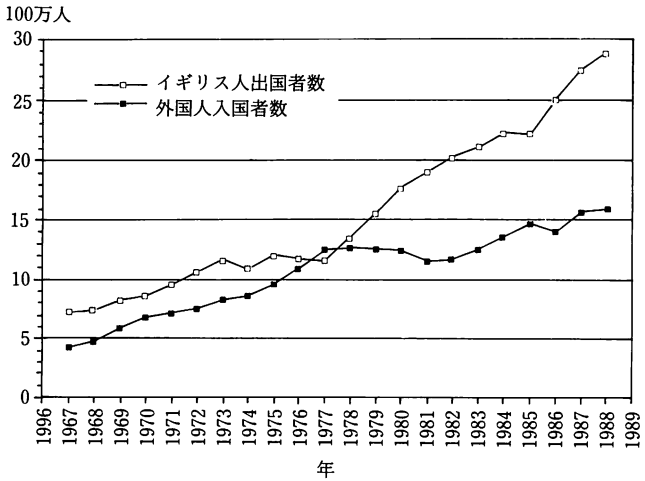
②自炊方式（セルフ・ケータリング）施設の増加と休暇頻度の増加…国内観光旅行が多様なものになった。

③ビジネス旅行の増加…とくに会議出席（コンベンション・コングレス）のための旅行が増加している。

この内、国内観光産業への打撃という点では、海外パッケージツアーの登場を契機とする海外観光旅行数の増加の影響が最も大きい。

海外パッケージツアーは、19世紀中期における国際鉄道網の発展を前提にした、トーマス・クックの団体割引旅行にさかのぼるものだが、ジェット機やジャンンボ・ジェットの登場による航空輸送力の増大ならびにグループ・チャーター便の普及を背景に1960年代にヨーロッパのツアー・オペレーターが、一般大衆を対象に開発したものである。

これにより、イギリス人の海外旅行者数はとくに1970年代後半から急上昇し（図－２）、現在では、人口の60％に近い、年間3,000万人以上が海外旅行を行



図－２　イギリスの出入国者数、1967～88年

『観光と経済開発』より転載

なっている(目的地の83%はヨーロッパ大陸)。イギリスは1970年代初頭から継続しての観光の純送り出し国であり、国際観光市場におけるイギリスの影響力は最大級である。

この影響で、イギリス人の休暇旅行における国内旅行比率は1972年の62%から82年には52%へと低下するなど、国内観光産業への打撃は大きいものであった。北ヨーロッパの海外休暇旅行の増加は、イギリスだけでなく、大部分が国内観光を犠牲にしているという[26]。イギリスの場合、早くからマス・ツーリズムが進展し、他国に先行した国内観光産業の発達があった分だけ影響は大きかっただろう。

加えて、1965〜85年でマイル換算で60%も増加した個人旅行である。1950年代までは鉄道を利用した団体旅行が典型的なイギリスの休暇旅行だった。現在では自家用車による家族旅行（観光旅行では72%）が圧倒的になっている。休暇の増加は、イギリスの場合、フランスのような連続日数の増加ばかりでなく、休暇頻度の増加として現われている。この結果、短期国内観光旅行(1〜3泊、平均移動距離208km）は横ばいなのに対して、長期国内観光旅行（4泊以上）が大きく低落している。短期旅行では、ビジネス旅行の影響を反映した、大都市への高度に社会経済的な特徴を持つ旅行、友人・親族の訪問、自炊方式の宿泊施設を利用したグリーン・ツーリズムなど、多様化がみられる（表－2)。かつての海浜一辺倒から、内陸部の田園地帯や古い温泉町、ヨーク、チェスターなどの歴史都市、ブラッドフォードやグラスゴーなどの工業遺産も観光対象となっている。

観光の多様化により、1960年には800ヶ所だったイギリス国内の観光地が1983年に2,300ヶ所、1987年には3,000ヶ所以上（オートン・タワーズ・アミューズメント・パークやナショナル・トラスト協会の各指定地を含む）となっている。イギリス政府は1969年に観光振興法を制定、イギリス政府観光庁およびイングランド、スコットランド、ウェールズの3つの観光局を設立(北アイルランドでは1948年に設立済み)するなど、政府による本格的な観光政策を開始した。1974年には、国際収支と地域開発の振興のために観光産業の役割を強調した政府指針が出されたが、新たな観光地のなかには政府の観光カ政策によるものが含ま

表２　宿泊施設別にみたイギリスの観光旅行、1973年および1988年（%）

	1973		1988	
	宿泊数	支　出	宿泊数	支　出
酒類提供免許を持つホテル	9	22	14	36
酒類提供免許を持たないホテル	9	14	6	9
ホリデーキャンプ	6	7	5	5
野営キャンプ	6	4	4	3
移動式キャラバン	6	3	3	2
固定式キャラバン	13	10	10	7
貸家、貸し部屋	10	10	10	10
一般家庭が提供する貸部屋	3	2	2	2
友人、親類の家	37	26	43	23
別荘	1	1	2	1

『観光と経済開発』より転載

れている。

会議出席などを目的とするビジネス旅行の成長も堅調である。国際会議や国際展示会に参加するビジネス旅行者は、平均的観光客の2.5～３倍の支出を行なうことがわかっており、国際会議の誘致ならびにエキシビションセンターなどへの投資が奨励されている。

３－４　海浜リゾートの衰退

イギリスでは、観光はきわめて重要な産業になった。観光産業による売上や外貨収入は自動車産業を含む主要な製造業を上回わり、とくに雇用面での経済効果が大きい。1980年代の製造業再編成による雇用の減少を観光業が補ったといわれている。ところが、国内海浜リゾートはこの繁栄に与れなかった。過去10年、全観光支出に対するリゾート地の割合は、1/2から1/3に減少し、宿泊数は25%も落ちている。最盛期には640あったモアカムの小ホテルと宿屋(ゲストハウス)は、1987年には267に減少したが、多くのホテルは精神病院退院者や生活保護者、老人のための施設に改築されてしまった。イギリスの海岸で１、２週間の休暇を過ごすことは、いまや魅力的なことでも意味のあることでもなく

なったのである。

1920〜30年代はイギリスの海浜リゾートの盛夏であったが、50〜60年代初頭は晩秋となった。戦後の耐乏生活が終わり経済が高度成長した頃、海外で休暇を過ごす者はまだ少数だったし、海外パッケージ旅行も開発されていなかった。イングランド北部の人びとは、自分のリゾート地に律儀に行き、滞在した。ある町全体が然るべき週にいっせいに海辺に出払うという伝統的な構造が続いていたのである。鉄道がこれを支えた。多数の臨時列車や行楽列車を、毎年同じ区間に走らせていた。

この期間、休暇のスタイルは著しく画一的になっていた。休暇は1週間単位が基本であり週の途中を予約するのはほとんど不可能だった。豪華ペンションに滞在しているような場合でも、客には何時に食事をし、何を食べ、何日間滞在するのかが明々だった。休暇キャンプでの活動はもっと規格化されていて、どこのキャンプ場でもやり方はそっくりで、同じパターンの演芸、同じ食事、同じ型の施設、同じ週行事だった。

ジョン・アーリ『観光のまなざし』は、1960年代中ごろ以降、海浜リゾートから人が離れていく一連の構造変化を、日常的であるものの変化により、何が非日常的であるとみなされるようになり観光に変化を与えているかとの視点からに、以下のようにのべている。

・桟橋と展望塔…イギリスの海浜リゾートには桟橋がつきものである。展望塔があることも多い。共にそこから景観を見ることを可能にするが、ここでは人間と自然が結びつき一体化するともいえ、非日常的である。だがいまでは桟橋と展望塔のほとんどが放棄同然となっている。人間と海を結ぶものは桟橋のかわりに橋、トンネル、ホーバークラフト、船、ヨットハーバー。人間と陸と空では展望塔よりも摩天楼、高層ホテル、宇宙カプセル、航空機…。これら日常的な体験の前に桟橋と展望塔という非日常性は霞んでしまった。

・遊園地・レジャーランド…海浜リゾートでは遊園地やレジャーランドも欠かせない施設だった。ブラックプール・レジャー・ビーチ（1906年開園）は、時々の最新テクノロジーを駆使したレジャー施設で誘客を行なってきた。ところがオートン・タワーズ・アミューズメント・パークをはじめとするテー

マパーク（鉄道の駅近くでなく高速道路網沿いに立地）が建設され、遊園地・レジャーランドの非日常性を希薄にしている。

- 休暇キャンプ場…これも海浜リゾートの重要施設だった。もともとは民宿の設備とサービスが劣ることからはじめられたものだった。しかしいまではなにか時代遅れなものになった。ノッティンガム州のシャーウッドの森のセンターパーク開発（（ドームのなかに常温29度の人工海浜があり、水泳・ヨット・カヌーができる）とでは競合にならない。今では海岸は技術でどこにでも造れるものになったのである。
- 海の魅力…イギリスの海の魅力も相対的に薄れている。イギリスでは、白い肌は優雅、有閑、閑居を表し、高い価値がおかれていた。ところがカンヌなど新しい上流向きのリゾートの発展にともなって、日焼が黒人ののびやかさとか官能性のイメージに結びつき、日光浴は人をより自然に近付けるとの意識が広がった。そして健康と性的魅力を生むのは海でなく太陽だと考えられるようになった。海外パッケージ休暇の第一のセールスポイントは「日焼け」である。このため北ヨーロッパのリゾート地の人気が低下した。一方で地中海のリゾートは、フランス、スペインにはじまり、ギリシャ、イタリア、ユーゴスラビアへ、そして北アフリカ、さらに最近ではトルコへと拡大している。
- 海水の汚染…イギリスの392の海浜の内、40％は水質基準に達していない。ちなみにフランスには1,498、イタリアには3,308の海浜がある。海岸は、陸と海の間、自然と文明の間に微妙に位置している複合スペースである。海岸線はさまざまな目で読み取られなければならない。海岸線はいかようにもなり得るからである。
- 都市の脱工業化…住む町の脱工業化により海浜へ逃避する必要がなくなった。
- レジャー施設・エンターテイメントの魅力低下…海浜リゾートへ行く目的にはエンターテイメントを楽しむことなどもあった。現在では、都市の方がリゾート地より、レジャー施設やエンタータイメントの上で優れている。テレビの普及も演芸や有名タレントを見るためにリゾートへ行く必要性を薄くしている。多くの都市は、住民と潜在的ツーリストのための消費が集中する場所として発展してきた。どの都市も、生活し、遊び、消費するためのイノベー

ションと刺激と創造性と安全に満ちた場所であることが要請されている。

4　まとめ

以上のべてきたことを筆者の解釈も含め整理して以下に列記する。

1）イギリス貴族の旅…聖地への巡礼の旅を除くならば、観光史に最初に記録される「楽しみを目的」とした（ある程度）「集団的社会的現象」としての旅は、「グランド・ツアー」である。16世紀になると学者や作家などの知識人が、ルネッサンスの影響により「ギリシャなる栄光とローマなる偉大」(E.A.Poe)に接するための旅を行なうようになる。だが彼らの旅は、いまだ個人的かつ特殊なものであった。イギリスの貴族の場合は少し違っていた。どことなく武骨で不器用な彼らには、当時の文化的先進国であるフランスやイタリアの貴族に対するコンプレックスがあった。このため、息子をヨーロッパに留学させて国際的に通用するジェントルマンに仕立てあげたいと考えた。３年から５年にもわたるヨーロッパ留学、しかも一流の学者の家庭教師つきでという、これ以上思い浮かばないほどの強力な教育システムを実行する。そのためのリスクは小さくなかった。当時は旅行者に対する便益など皆無に近い。それどころか、ローマ時代に舗装された幹線道路は帝国の滅亡後は荒廃のまま、不潔きわまりない宿屋、悪徳商人、海賊・追剝ぎ…。このため自家用馬車から折畳みベッド、ピストルまで、移動と滞在と安全に必要な物品は全部用意して、御者や護衛をかねた召使などの御供たちと一緒に送り出したのだった。もちろん大金を要するのだが、イギリス貴族は巨大地主であり群を抜いた経済力を保有する。貴族の後継ぎとしては当然のこととしてじきに定着するようになる。このようなイギリス貴族の御曹司とその旅を形容して「ツーリスト」や「グランド・ツアー」という用語が生まれる。グランド・ツアーは、このような文化格差と経済格差を背景にして生まれたといえる。

　温泉や海浜リゾートは、地域振興のため健康・保養をアピールする地元と１年の大半を所領である田舎で暮らす貴族・ジェントリのレジャー需要が一致して成立したものである。当初は保養の場であっても、じきに娯楽の場になるのは必然である。ロンドンに劣らぬ施設では「儀典長」によるサービス

が提供され、王室を含む貴族たちの「ダンディ」を旨とする「社交生活」が展開される。バースやブライトンはロンドンとならぶファッションセンターとなり、貴族たちは、流行遅れといわれぬためにも駆けつけねばならなかった。身分規定の不明確なジェントリにとっては、ここでも大枚をはたいて、自己をアピールする必要があったのだった。イギリスの上流階級による、温泉・海浜リゾートの施設やサービス、地域住民との関係などは、その後先進各国の各階層に普及する観光・リゾートの原型となり現在に至っている。

2）中流階級の観光…産業革命とともに勢力を強める中流階級は、労働の価値への崇拝を中心に勤勉や自助に価値観を置く人々であった。彼らは社会の進歩はこれら信条の実践にあると考え、労働者階級に対して「正しいレクリエーション」を指導する一環として、週末には、深酒でなく海浜リゾートで過ごすことを奨めたりする。彼ら自身の生活では、当初の倹約生活から徐々に勤勉・自助の成果である経済力を消費に示すことが「リスペクタビリティ」にかなうとの考えから、ジェントリと同じ「衒示的消費」を行なうようになる。これを可能にしたのは、19世紀に登場する各種のサービス産業である。観光では、御者つきの自家用馬車のかわりに鉄道、御供や案内人のかわりにトーマス・クック社などの旅行業、宮廷やカントリー・ハウスでの宿泊のかわりに、パリのグランドホテルなどの豪華ホテルがサービスを提供した。これら観光産業は、集団的社会的現象としての楽しみを目的とした旅行、すなわち観光（ツーリズム）を定着させ促進させる。

3）労働者を含む大衆観光…19世紀末になると、国民所得が増加し、労働者階級もレジャー支出を行なうことが可能になる。加えて、イングランド北部織物工業地帯の労働者たちの労使交渉の成果が先導して、休暇制度も採用される。この結果、ウエイクス・ウイークの休暇には共同体が一体となって海浜リゾートで過ごす習慣が普及する。この大衆観光（マス・ツーリズム）には鉄道の大衆化も大いに寄与する。海浜リゾートでの休暇は、有給休暇制度が法制化されたこともあって、1920～30年代に最盛期を迎える。

4）海浜リゾート…観光産業からみて、大衆を大量に送り込む（マス・ツーリズム）ための最適地は海浜である。都市からの脱出者の需要にこたえる陽光

や空気がそこにあることは理由の一つだが、何よりも、海浜は広大なので収容人数は問題にならない。接遇にもあまり細かな配慮は不要である。宿泊施設として地元の民宿や小ホテルに加えて休暇キャンプ場、レジャー施設として娯楽機器などを備えた桟橋や展望塔…その程度の投資なら地元資本でもなんとかなる。イングランド北部の工業都市に近い海岸の街々では、都市コミュニティと鉄道会社に働きかけて、たとえばブラッドフォード専用リゾート＝モアカムのようなネットワークが結ばれてゆく。都市にある各コミュニティは、その経済状態や志向にあわせた「色調」を持つ特定のリゾートに、鉄道を利用していっせいに出かけ、毎年ほとんど同じ内容の休暇を過ごすことが慣習となるのだった。

5）海外パッケージツアー…1960年代になると航空輸送力が飛躍的に増大し、旅行業者が大衆を対象とした海外パッケージツアーを販売するようになる。目的地は同じ海浜だが、「日焼け」のできる地中海の海浜リゾートであった。そのころには健康と性的魅力を生むのは海でなく太陽であるとの認識が一般的になっていたのである。パッケージを利用した海外休暇はイギリス人の間に急速に浸透し、同時に観光産業はイギリス経済における主要産業としての地位を確立する。

6）海浜リゾートの衰退…海外パッケージの成長と反比例するように、国内の海浜リゾートは衰退してゆく。だが、衰退は海外パッケージとの競争によるものばかりではない。まず、観光の個人化・多様化がある。イギリス人は鉄道利用の団体旅行よりも、自家用車利用の家族旅行を圧倒的に支持するようになり、新たな観光開発もあり、行き先も多様化した。海浜リゾート付属のさまざまなレジャー施設やエンターテイメントは、大規模なテーマパークの建設やテレビの登場によって魅力を低下させた。現代都市の多くは、住民だけでなく旅行者のための消費の場として発展し、リゾート地を数段上回るレジャーやエンタータイメントが体験できる。その他、多くの都市は脱工業化により環境が改善された、海水の水質は地中海の方がよいことがわかった…など、さまざまな理由があった。日常生活のなかに、かつては観光という非日常性の場専用だった物やサービスが取り込まれ、非日常的であるとみなさ

れるものが大きく変わっていったのである。

7）ヨーロッパ観光の展望…地中海を舞台とした、いわゆる4S観光(sun,sea, sand,sex/shopping)の余命はいくばくもないといわれる。その根拠の一つはフランス人のバカンスにおけるリベエラ離れである。彼らは普通の田舎あるいは趣味や好みのスポーツに結びついた場所を求めているという（『観光・リゾートのマーケティング』)。その他、さまざまな立場、観点からヨーロッパ観光の展望は行なわれているが、それらはすべて「個別化、多様化」という言葉に集約されるように思う。先進国における観光が「マス・ツーリズム」から「スモール・ツーリズム」への移行の過程にあることは、一般の消費が「フォーディズム」から「ポスト・フォーディズム」に移行しつつあると同じようにあまりにも明白な事実なのである。

イギリスをはじめとする西欧先進国およびわが国の観光の発展過程においては、人および物の場所的移動に情報を加えた、広義の交通の発達が大きな要因となっている。

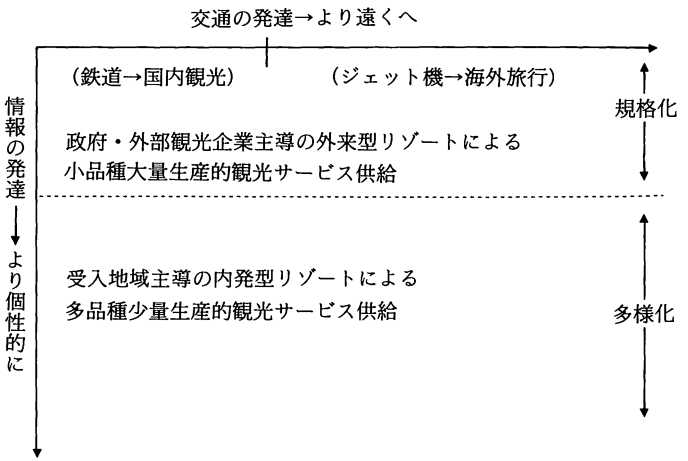
交通業が独立産業として成立するのは、農産原料を加工するさまざまな工業が農耕から分離し、資本主義的生産の一形態であるマニュファクチュア(工業制手工業)が開花する18世紀のことである[27]。イギリスにおいては18世紀末から19世紀にかけての産業革命を契機に、機械制大工業により生産力がきわめて増大する。その結果国内・世界市場が創出され、原料や製品の大量・迅速・規則的な輸送が必要となるが、蒸気鉄道と蒸気船が発明されて「交通革命」と呼ばれる。

18世紀には、本文で述べたように、鉄道と蒸気船は〝楽しみを目的〟とした人々の移動のために広範に利用されるようになる。ツーリズム（観光）の成立である。交通業務を補完して旅行業が誕生し、旅行全体を包括して扱うようになり、観光の大衆化(マス・ツーリズム)が進行する。1950年代のジェット機、その跡のジャンボ機の発明は、航空業における輸送能力増加と輸送コスト低下をもたらし、旅行業はこれをパッケージ・ツアーに組み入れて、先進国の一般大衆の海外休暇旅行を可能にする。

人は地域性（風土）の中に生きている。人々が五感で感じる風土の景観の

地域差から来る欲求が観光行動の原点である。遠くに行けば行くほど地域差が大きいと想像されるので、「より遠くへ」は観光需要一つの方向である。交通技術の革命と旅行の規格化・標準化（政府・観光産業主導の観光地における外来型開発を含む）による観光の大量生産方式がこうした観光需要に応え、一般大衆への観光の普及を促した。

図－3　交通の発達と観光需要・供給



観光の発展に深くかかわるもう一つの要因は、マスメディアの浸透や高等教育の普及による大衆の情報化である。知的大衆の出現は、全体として、個人個人のアイデンティティへの関心を生んだ。自分へのこだわりは、観光旅行を含む商品選択における自己表現手段としての自覚を生み出すのである。「より個性的に」は、もう一つの観光需要の方向である。これは、受入地域の自治体や住民が主導する内発型観光開発に適した、多品種少量生産志向の観光需要である。

わが国においては、円高を原因とする「観光の空洞化」が問題化している。しかしこれには、「より遠くへ」の観光需要が及ぼす構造的な側面もあること

を見逃すことができない。また、「より個性的に」の需要が、人々の金銭や時間の余裕不足により阻害されると、観光行動は「安・近・短」（安く・近く・短期間の観光志向。わが国における観光需要の特徴）のようなゆがんだ形になると考えられる。

註）

1）前田勇編著『現代観光総論』，第1章「観光」の概念，学文社，1995における、観光の作業仮説のひとつ。観光が人間の社会的行動であることの側面を捉えている。

2）ウィリアムＦシーアボルド編著・玉村和彦監訳『観光の地球規模化－次世代への課　題－』，1観光の状況と範囲，晃洋書房，1995.

3）塩田正志「『観光』の概念と観光の歴史」，鈴木忠義編『現代観光論』，有斐閣，1994.

4）塩田正志＋長谷正弘編著『観光学』，第2章観光の歴史，同文館，1994.

5）『ブリタニカ国際大百貨辞典』，イギリス史，ＴＢＳブリタニカ，1972.

6）本城靖久『グランド・ツアー（英国貴族の放蕩修学旅行）』，1準備，そして出発，5グランド・ツアーのその後，中公文庫，1994.

7）指昭博「人々を隔てる壁－ジェントルマンの支配する社会－」，井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』，昭和堂，1994.

8）松浦京子「生活のうるおい－余暇文化－」，井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』，昭和堂，1994.

9）角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国（イギリス都市生活史）』，8リゾート都市とレジャー，平凡社，1982.

10）日下裕弘『日本の自然遊－湯浴の聖と俗－』，第1章湯浴の聖と俗，近代文芸社，1995.

11）佐藤誠『リゾート列島』，第1章欧米リゾートの潮流，岩波新書，1990.

12）小池滋『もうひとつのイギリス史』，第10章リゾート，中公新書，1991.

13）山田勝『イギリス貴族（ダンディたちの美学と生活』，第2章イギリス貴族のダンディズム，創元社，1994.

14）小谷達男『観光事業論』，第2章観光事業の特質，学文社，1994.

15）ジュール・ヴェルヌ＝田辺貞之助訳『八十日間世界一周』，創元ＳＦ文庫，1976.

16) 松浦京子「社会の規範－リスペクタブルであるために－」，井野瀬久美恵編『イギリス　文化史入門』，昭和堂，1994.
17) 松浦京子「生活のうるおい－余暇文化－」，井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』，昭和堂，1994.
18) 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』，第2章生活史から見た上流と中流，ミネルヴァ書房，1980.
19) 川北稔編『「非労働時間」の生活史（英国風ライフスタイルの誕生）』，まえがき，リブロポート，1992.
20) W．J．リーダー＝小林司・山田博久訳『英国生活物語』，第1章ヴィクトリア朝の英　国人，晶文社，1983.
21) 水野潤一『観光学原論（旅から観光へ）』，第4章旅と文明，東海大学出版会，1994.
22) ジョン・アーリ著・加太宏邦訳『観光のまなざし』，第2章大衆観光と海浜リゾート地の盛衰，法政大学出版局，1995.
23) 新城常三『庶民と旅の歴史』，ＮＨＫブックス，1971.
24) ㈳国際観光振興会『海外の旅行市場』，英国（ロンドン事務所），㈶国際観光サービスセンター，1992.
25) アラン・ウイリアムス、ガレス・ショー編著・廣岡治哉監訳『観光と経済開発－西ヨーロッパの経験』，第9章イギリス，成山堂書店，1992.
26) Ｂ．グッドール＋Ｇ．アッシュワース著・山上徹監訳『観光・リゾートのマーケティング（ヨーロッパの地域振興策について）』，第2章ヨーロッパの観光形態と構造変化，白桃書房，1989.
27) 柴田悦子他『交通論を学ぶ』，第1章資本主義の生成・発達と交通，法律文化社，1991.